

# 国際演劇交流セミナー 2017-2018

## *International Theater Exchange Seminar 2017-2018*

ごあいさつ

一般社団法人日本演出者協会 理事長  
流山兎祥

日本演出者協会の国際演劇交流セミナーが始まって今年で 20 年の節目の年を迎えることになりました、関係各位に厚く御礼申し上げます。1999 年から文化庁の本格助成も始まって協会国際部は世界各国の演劇人と出会いワークショップ、レクチャー、シンポジウム、リーディングなどを行う国際演劇交流セミナーを 20 年に渉って企画開催してきました。世界には、豊かで多様な演劇が存在することを学び、共有しあうことは演劇の根本である《他者》との出会いです。国際演劇交流セミナーは、日本演劇が思考してきている所謂、明治以降の近代劇＝欧米中心の思考をドラスティックに変え、演劇を必要とする世界各地の現代演劇のもう一方の豊かさ（オルタナティブ）を体験する旅でした。

2015 年には韓国、パレスチナ、オーストラリア、デンマーク、メキシコ、2016 年にはアフガニスタン、マカオ、ウエールズ、といった地域の特集。勿論、ロシア、フランス、イギリスといった国の演劇人との交流も同時に行っています。2017 年、2018 年の本合併号には韓国、フランス、台湾、アルゼンチン、スイス、デンマークとの試みの特集が掲載されています。わたしも参加したインドネシア、台湾、韓国の特集は貴重で面白い体験でした。わたしはインドネシアには 2 度公演してインドネシア演劇が如何に社会に、地域に根差しているか、その身体表現の豊かさの根源を共にワークショップすることで再確認しました。韓国演劇のトップシーンを牽引している劇作・演出家：パク・クニョン氏の独自のワークショップは日本の若手演出家にとって目から鱗のプレゼントになりました。今、韓国と並び最も芸術に力を入れている台湾のトップ・リーダー：汪兆謙氏のドキュメント演劇も多くの参加者を集め好評でした。また、アルゼンチンのエミリオ・ガルシア・ウエービ氏の「既成概念を揺るがす演出を～その創造のプロセスとは何か～」は京都と東京の 2 か所で各 6 日間開催し多くの参加者がアルゼンチンの鬼才と衝撃的な実験を重ねました。舞台芸術は既成概念の破壊とその後の創造の果てにあるのです。

世界中の地域の演劇人、演出家と出会い彼らが彼の地で実践している演劇の多様性を学び共有し、共に実験して、社会に向けて普及のための公演を行うことで日本の演劇人、とりわけ若い世代の演出家を育

成する事業が国際演劇交流セミナーです。演劇の持つ真の自由さを獲得し、社会という《他者》のために文化芸術は存在します。地球上、それぞれの場所の必要性から生まれる演劇の多様性を重視することはわたしたちの課題です。いま、世界はネオ・ナショナリズムとポピュリズムの波に翻弄されています。日本の若者たちは「私はダメだ」「俺はクズだ」と思う人が米・中・韓と比べて突出しているという検査結果が出ています。スマホとインターネットの谷間に「わたし」という「個」が孤立し彷徨う 2019 年の現在です。まもなく、改元。日本を変えたあの 3・11 東日本大震災から 8 年です。3・11 を忘却の彼方に押しやるのではなく、忘却の痕跡を自らの身体に刻むのがわたしたち表現者（当事者）の仕事です。2015 年、東京と福島で開催したパレスチナ特集で来日したイエスシアターと福島の演劇人の交流は今も続いています。演出家：イハップ氏は「文化なしの闘争はない、社会にとって演劇は必要不可欠だと想える若い世代を育てたい」語った言葉は今も生きています。この想いがこの事業の根本です。

2020 年代をどんな時代にしたいのか？ が演劇人に問われています。少子高齢化の超格差時代到来が予測される時代、わたしたちは決してネオ・ナショナリズムやポピュリズムに屈することなく国境を越え世界の演劇人たちとともに歩んでいきます。

また、企画の具体化にあたっては、多くの研究者、翻訳家、評論家、関係各国の大使館、国際交流基金などにご尽力いただいていることに感謝、そして何よりも文化庁のサポートに厚く御礼申し上げます。そして、何よりも、この年鑑が多くの若い演劇人に読まれることを切に願っています。

(2019 年 3 月 5 日)

# スイ斯特集

【INTRODUCTION】

## 二次元を舞台化する

### ～ 演劇的な置き換えのダイナミズム ～

漫画『遙かな町へ』（谷口ジロー）あるいは小津映画を媒体として

企画：山上優

#### スイ斯特集2018 企画への発想

2017年2月に日本漫画界の大きな存在、谷口ジロー氏が他界された。『神々の山嶺』『父の暦』『ブランカ』等で知られる谷口作品は、日本と同様あるいはそれ以上の読者をヨーロッパ各国で獲得している。200年以上の長い歴史をもつ世界に冠たる美の殿堂、パリのルーヴル美術館によって「漫画」は、「建築」「彫刻」「絵画」「音楽」「文学」「演劇」「映画」「メディア芸術」に次ぐ9番目の芸術と位置づけられ、2016年には「漫画」をテーマにしたルーヴル美術館特別展が東京で開催されている。（スイス、ベルギーを含むフランス語圏にはBD「バンド・デシネ」という日本の「まんが」やアメリカの「コミックス」に相当する漫画文化がある）あるきっかけで谷口作品の「遙かな町へ」という作品と出会い調べているうちに、スイスのSTT（スーパートロップ）というカンパニーがこの漫画を演劇にして上演し成功をおさめ、ツアーも行っていることを知る。早速このカンパニーと連絡をとってみると、彼らの演劇は演劇上演の為に書かれた戯曲でないものを題材に、演劇作品に翻案し上演するのを特徴としていること、近年は小津安二郎の映画『東京物語』を原案に日本人俳優の笈田ヨシ氏と創作していることが分かった。はじめ日本人漫画家、谷口ジローの作品に触発されて創作をしたが、演出家も劇団自体も日本文化にことさら詳しいというわけでもなく、来日したこともなく、ただ想像だけで作品を創ったと話す。

折しも当協会主催「演出者の集い」でも演劇の現在と展望について語られ、いわゆる2.5次元演劇のことが話題となった。漫画やゲームといった2次元の世界を舞台化する2.5次元演劇も演劇の1ジャンルとして今日無視できない現実になっていることは確かだ。

日本文化に興味を持った我々の未知の演劇人が2次元の芸術から創る演劇、と日本の演劇人、実演者がこの機会に出会うことは意味があるのではないかと考えた。『二次元を舞台化する～演劇的な置き換えのダイナミズム～』と題されたセミナーは、特に日本オタクでもないヨーロッパの演劇人が2次元から演劇を立ち上げる着想のあり方を探るものとなり、そこに2次元を舞台化する芸術の独特の遠近法について考える機会になったのではないかと考えている。東京最終日の、参加者によるプレゼンテーション後の意見交換では、舞台美術家の加藤ちか氏をはじめ、演劇界以外の芸術家も参加されて活発に発言されていたこともあわせてご報告したい。

東京開催の後は、札幌会場の扇谷記念スタジオ ZOOに場所を移し、札幌の演劇人たちと新たなセミナーが始まった。札幌会場は劇場空間であること、新しい参加者10名との作業になったことで、演劇がその場所と人と時間によって大きく影響されることを改めて実感することになる。札幌最終日の2018年9月6日には北海道胆振東部地震が発生。参加者をはじめ、講師も実行委員も被災し、私たちは災害という出来事の渦中にいた。演劇が現在と、現実と向き合うものであることを目の当たりにし、忘れがたい貴重な体験となった。

#### ※ 谷口ジロー（1947-2017）

鳥取県生まれ。ハードボイルドやSFなどの迫力ある画から日常を丁寧に紡ぐ描写まで、幅広い表現で知られる日本を代表する漫画家。日本、ヨーロッパで多くの賞を受賞。2011年にフランス芸術文化勲章「シュヴァリエ」受賞。谷口の漫画は、現在世界15か国で翻訳・出版されている。

## 【in 東京】

2018年8月26日(日)～30日(木) ゴコジスタジオ

## 【in 札幌】

2018年9月1日(土)～6日(木) 扇谷記念スタジオ ZOO

カンパニー STT 作品、ドリアン・ロセル演出『Quartier lointain』 原題『遙かな町へ』(2009年初演) は昨年他界した日本人漫画家、谷口ジローの同名の漫画を元にしたもので、スイスのみならず国外でも大ヒット、2015年までロングツアーとなる。舞台化は最小限の台詞で、数百ページの原作漫画を俳優のコーラスで構成し、見事に成功している。Voyage à Tokyo『東京への旅』(2016年初演) は、小津映画の『東京物語』の舞台化。日本人俳優の笈田ヨシが出演し、昨年までツアーが行われた。本セミナーでは、映画や二次元の漫画を題材に舞台を構築していく特有のパースペクティブに着眼し、その創作過程を体験するワークショップとなった。

### 【 in 東京 】 会場 ゴコジスタジオ

#### ワークショップ

8月26日(日) 14:00～16:00 上映会  
16:00～20:00 ワークショップ  
8月27日(月)～29(水) 14:00～19:00 ワークショップ

#### プレゼンテーション&意見交換

8月30日(木) 13:00～18:00

#### 参加者によるグループ発表、および反省会

8月30日(木) 18:30～20:00

### 【 in 札幌 】 会場 扇谷記念スタジオ ZOO

#### ワークショップ

9月1日(土) 14:00～16:00 上映会  
16:00～20:00 ワークショップ  
9月2日(日) 14:00～20:00 ワークショップ  
9月3日(月)～5(水) 19:00～22:30 ワークショップ

#### 参加者によるグループ発表、および反省会

9月6日(木) 19:00～22:30

(※9月6日(木)は震災のため希望者のみの参加、ホテルロビーでの話し合いとなった。)

通訳 浅井宏美 山上 優

担当 山上 優 柏木俊彦 前田 透 浦竜也

## ドリアン・ロセル / Dorian Rossel



演出家。1996年、レコール・セルジュ・マルタン（ジュネーヴ）卒。2004年、Cie STT（カンパニー、スーパー・トロ・トップ）創立。Quartier lointain『遙かな町へ』、soupçon『疑惑』などの創作でコメディ・ジュネーヴの芸術参与に招かれる。その後ローザヌ・ヴィディ劇場での活動と共に複数の作品でツアーを開始。2012年フォーラム・メイラン劇場芸術参与となる。2014年アヴィニオン演劇祭オフ参加。スイス・ロマンド劇場高等学院、カンヌ俳優学校、サン・エティエンヌ演劇学校等で様々なワークショップを行っている。2016年、ピーター・ブルックの常連俳優、笈田ヨシ氏と共に Voyage à Tokyo『東京への旅』を創作し昨年11月までツアーを行う。

## デルフィヌ・ランザ / Delphine Lanza

共同演出家、女優。1972年フランス、アヌシー生まれ。スイスの演劇及び映画界で活動する。

1999年の映画 Attention aux chiens『犬にご用心』でスイス映画女優賞受賞。カンパニー

STT の創立から全作品に関わる。



### □ カンパニー STT Cie Super Trop Top

演劇上演のために書かれた戯曲でないものを題材に演劇作品にアダプテーション（翻案）、トランスポジション（置き換え）を行い上演するカンパニー。

## 【 THE TEXT 】

### 【 東京 】

ワークショップ1日目

8月26日(日) 14:00~20:00

(14:00 ~ 16:00 ビデオ上映会、 16:00 ~ 20:00 ワークショップ以下WS)

進行: 山上

本日の流れの説明→国際部副部長あいさつ→講師紹介・通訳紹介・実行委員紹介

○ **山上(進行)** こんにちは。実行委員の山上です。今回はワークショップの開催前に、上映会を設けました。映像、漫画を原作にして舞台芸術を創作している講師のカンパニーのまずはビジュアル的な紹介がその目的です。

ビデオ上映会を実施 14:00 ~ 16:00

講師のカンパニーが上演した作品のビデオを抜粋して上映。一般参加者もあり、協会員も自由参加。

・ビデオ上映 Voyage à Tokyo「東京への旅」

(原作 小津安二郎監督映画『東京物語』)

『東京物語』は最初、細かい情報のシーンがたくさん続く。

○ **ロセル** 漫画作家・谷口ジローは小津映画に非常に影響されていました。東京、日本のことを実際には知らない私たちが、僅かな情報からイメージを膨らませていく作業でした。

・ビデオ上映 Quartier lointain「遙かな町へ」

(原作 谷口ジロー作同名の漫画)

「遙かな町へ」公演ビデオを抜粋で約30分見る。

○ **ロセル** 1963年にお父さんがいなくなるシーンを漫画では、作品の半分まで時間を掛けているが、舞台化では時期を早めています。映画のシナリオからストーリーを立ち上げていきました。



ワークショップ ① 16:00 ~ 20:00

クロス<集団演技>は、講師が率いるカンパニー（劇団）の創作における基本の一つである。複数の俳優の身体と声を通して、アンサンブルで物語を構築していく。そのためのワークショップを実施した。

※用語解説「クロス」

元はギリシャ古代劇の合唱隊のこと。観客に対して、鑑賞の助けとなる劇の背景や要約を伝えるなどした。英語では chorus「コーラス」の表記になる。

・全員でサークルになる。

○ **ロセル** 自分があまりしゃべり過ぎないように心掛けます。色々と試しながら、エクステンジ（アイデアの交換）ができればと思います。私たちの創作過程の基本、クロス（集団演技）の考え方をベースに共同作業を始めていきたいと思っています。

#### ■アンサンブルに必要な情報の伝達エクササイズ

- 1) クラップ（clap 拍手）を回す。受け取る側が送る側と同時にクラップ。
- 2) 1人2回クラップ、2回目は次の人と同時に。
- 3) 2つの情報が回る。
- 4) クラップを円内のだれでもランダムに回す。

確実に。

- 5) クラップでなく何か見えない「物」を想像して回す。例えば棒を回す、受け取った人は形を変えて回す。受け取る時は形や質量や感触をしっかりイメージして確実に受けとる。それから変化させてみる。送る相手を明確に。隣の人に手渡しもできる。引き延ばす、鳥に変えるなど自由に。

アイコンタクトを忘れずに、丁寧に情報を渡すのがポイント。



#### ■コーラス（クロス）感覚のエクササイズ

- 1) ステップを踏む。全員が先ず1人のリズムに合わせて始める。円周にいる人（クロス）は同じリズムをキープしてステップを続ける。リズムを保つことが大切。誰か1人が円の中心に出て、円周と違うリズムをクラップする。中心に、もうひとりを招く。しばらく2人がクラップで会話する。中心にいる人は円周からインスピレーションを得て、クラップする。提案するのは単純なリズムで十分。

2) コロス（円周にいる人）のリズムを手と足両方に増やしてみる。コロスは自分たちのリズムに集中すること。コロスが一方向を見て、円を廻り出す。動きを複雑にしていく。円を小さくしていく。

3) ロセルがコロスを引率し、ランザが中心の対話する2名をリードする。中心の人は音を発して会話する。中心に居る人が3人になってもいい。コロスは機械的にならないように注意する。中央の人はそれに支えられて会話する（コロスと音が重ならない様に注意しながら）。

円周が戯曲のリズム、中央にいる人が登場人物と考えることが出来る。（ギリシア悲劇などのように、登場人物とコロスの関係のような対話。）演劇的な構造。

4) コロスは静止。円内の2人は身振りと言で会話。機関銃のようにやらないで、しっかり受け取ったら、相手に影響されてから返す。まず、円内に入る入り方も、シンプルに尚且つ丁寧に。自分自身の中に起こっていることを自覚しながら。1人が円内に入り、様子を見てもうひとりが入る。目を半分閉じて、肩をおとして残念、といったふうに前に進んでみる、または急に身体が元気になって身を起し、目を開けて歩いてみる。自分の中で変化を感じられるだろうか。

5) 全員でリズムを合わせて普通に歩く。誰か1人の名前が呼ばれる。他の全員はその人の歩き方を真似る。その人の癖を強調してもよい。（1人がコーラスリーダーになるエクササイズ）

6) 椅子を持って再び円になる。コロスと、円の中心にソロをやる人を1名つくる。この先シーンを作っていく基本の考え方になる。



○ **ロセル** 俳優は1人1人が演出家であると言えます。どの俳優も自分がいつ、その登場人物を見せるか、一番いいタイミングを見つけなければならない。自分の楽譜をどう創っていくかを稽古の間に探していく。会話の相手は、相手を活かすために自分がいつ黙るかを知らないといけない、エネルギーをキープしたままで。ここまでやってきたことは、演劇の生き生きした会話を作るために必要なエクササイズだったと思ってください。

ギリシア悲劇では話している人より、聞いている人の方が大切。話している人は、既に見てきたものを語っているので、むしろ聞いている人がどう受け取るかが興味の中心になる。つまりフォーカスがどこにあるかは、コロスがそこに存在していることで明確になる。舞台の上に、いつもアクティブな俳優がいることより、聴くこと、感じる事が、俳優の役割として、むしろ大切なことと言えるでしょう。

## ■共調のエクササイズ

息を吸って、止めて、そして吐く。吐くときに何かゼスチャーを付ける。5分間、自分のためだけにやる。正直に。次第に自分のリズムで歩き出し、別の椅子に座る。自分の椅子に戻る。次に一人が息を吸って吐き、隣の人が息を吸って吐くときにゼスチャーを付ける。その最後に、音を付ける。息

を吸いながら、ゼスチャーをやめる。息を吐くと、隣の人が吸う。(はじめて試みるエクササイズ。自分に目を向けながら、ゼスチャーをすることによって外に発信するという行動をするのが目的) 序・破・急。相手からしっかりエネルギーを先ず、受け止めること。

－ 15 分休憩 －

## ■即興的なエクササイズ

1)舞台に椅子が1つある。1人ずつ舞台に出て、1分間座り、去る。シンプルなソロのエクササイズ。緊張とのコンフリクト。出来れば言葉を使わないでやってみる。Spécificité du théâtre 演劇の特性の実験。登場から既に始まっている。まず、自分と椅子との距離が大切、座る権利があるだろうか。座っても壊れないのだろうか。俳優が全部やってみせようとしなくてもいい。座るとき音がしてしまったことも無視しない。その出来事と、そこに居る人を見ている観客がストーリーをつくる。L' espace vide「何もない空間」を先ず、受け止めることが大切。

2)舞台に6個の椅子が有る。5人舞台に出て座る。

5人は誰かを待っている。来る人が誰なのかは知らない。それだけの設定の即興エクササイズ。映像ならば、カメラ割で観客がどこを見たらいいか提示されるが、舞台では、俳優が動いて何を見せるかを決めなければならない。5人いたら、1人のやることはさほど多くないというよりも、必ずコーラスリーダー(コロス長)が必要になる。

3)1人ずつ舞台に登場する。舞台にナイフが落ちている。拾ってハケる。(誰かを殺そうと思っているのかなど意味付けは自由。)

## ■ふりかえり

全員椅子を持ってきて円になる。

○ **ロセル** 「ナイフ」の演技は面白かった。カメラがあればクローズアップしてくれるが、劇場では空間の中で、どんなリズムでどのように lecture「再生」(見せ方)の段階を変えるか。この Transposition(変換)が興味深い。どのようなカットで、人殺しまでの流れを作っていくのか。

transposer 移し替える作業。

例えば、『遙かな町へ』を舞台化するとき、まずセリフだけ抽出したら何も残らなかった、つまらないものになった。つまり、セリフの無いところに色々な要素があるということ。視覚的要素に重要性がある。



明日までに宿題。時間の経過を表現するための何かオブジェをひとつ持って来る。内容は何でもよいが、起承転結や序破急などの構成を考えること。

ワークショップ 2 日目

8 月 27 日 (月) 14:00~19:00

○ **ロセル** 私の持っている方法論を皆さんに披露しに来ているではありません。「詩を書いている途中の詩人」のような作業が俳優だと思う。探している人、でいることの体験。毎日新しいものを見つけていきたい。

### ■丁寧な受け渡し

椅子を持ってきて円になる。一人一人立ち、自分なりの手話 (3つの動作) で誰かに渡す。始める前にしっかり時間をとってから、死ぬ前に「これだけは伝えておきたいこと」を手話で示す。目で語ることを大切に。

### ■ウォーミングアップのムーヴメント (講師ランザ)

椅子の上で坐骨を支点に腰をゆする。骨盤を前後させて、背中をロールアップしていく。最後、頭を上げるときは花が咲くようにイメージして。口の中の運動、舌を休めてのどを開く。頭の先、鼻の先に鉛筆が付いていると思って小さな円を描く。肩を揉む。

声を出していく。母音から。口の中で O, E は両目に当てるように。U (ou) は鎖骨の辺りに。自分の声を聴く。片方の手のひらを自分の口の前に、一方の手のひらを耳に。両手のひらを貝殻のようにする。左右変えて。また、両掌を耳の後ろに当てる。

声の響き。ふつうの自分の音程で喋る、高音で喋る、思い切り低音でしゃべる。もう 1 度ふつうの音程で喋る。これを短時間やることで、即効的に響きを持たせることができる。

— 休憩 —

### ■昨日の宿題の発表。

テーマ「過ぎていく時間」を表現する。参加者

#### 1 人ずつの発表。

1. 闇の中、1 人の人を後ろからサーチライトで照らしていく。(光源は下手から上手へ移動) 影が、時計の針のようになって動いていく。



○ **ロセル** すばらしかった。シンプルで説得力がある。

○ **ランザ** 真後ろに立って光源が中央で隠れたとき、より長い時間をとってもよかったのではないか。同じことを別の人にやってもらい、発表者本人に見てもらう。即興を稽古中にたくさんやって、実際に本番の舞台に全部が上がらなかったとしても、私達の間にはその経験の記憶が残っている、それも作品を豊かにする要素。



2. 紙飛行機が落ちる。

○ **ロセル** 同じことをおじいさんがやる、少女がやる、で意味が違ってくるのではないか。ベケットは「間違いは繰り返せ、次はもっと上手く間違えること」と言っています。毎回飛ぶのに 10 分かけて、毎回落ちるのもおもしろい。もうひとりがすごくよく飛ぶ飛行機をもってくるとか。また、飛ばすモーションだけにして、軌道を見ている、とか。(参加者からも様々な意見が出る。)

3. オブジェは傘1本。嵐がくる。傘に隠れ横たわる。たたんで立ち上ると老人になっていた。

○ **ロセル** はけていく最後が素敵でした。省ける要素がまだあった。減らすことで、より強くなるということもある。



4. 本を1ページずつ破いて、その上を歩いていく。最後に本は飛んでいく。

○ **ランザ** 日本の感覚では、本やノートを破くことは、心が痛んだりするか？ 本だとよりいっそう、痛むとかありますか？

○ **参加者** 読んだページを破くのはよくわかったから 2 回目からも読む行為をしっかりとや



ったらよかった。白いノートに何か書いて、それを破いたらどうだろうか。



○ **ロセル** 見ていた人は同じことを自分ならどうやりますか？

○ **参加者** もっと置き方を丁寧にやる。

○ **参加者** 白い紙を使ってやってみる。

○ **ロセル** 同時にはじめて、紙がなくなったときに、時間をとってくれたので、観客に想像することができた。紙がなくなったときに、本にいくこともできるし、紙がなくなったときに、モノローグが始まるなど。ヴィジュアル（それまでの動き）があってセリフが始まるというつくり方は、まさに『遙かな町へ』でやっていたやり方です。マリヴォーやモリエールのテキストをやるのとは全く違う取り組み、想像力から舞台を創ること。

5. 身支度をする。小さな花かごが最後に出てくる。

○ **ロセル** とても、ミステリアスだった。谷口ジローは、漫画『Tantan』の作者エルジェ（ベルギー）に影響を受けています。“クリアな線”がベルギーのイラスト学校概念。『遙かな町へ』を舞台にするときもそれを意識しました。即興をたくさんやるのは、『遙かな町へ』を舞台化するときの作業そのもの。直ぐにセリフから入らないというやり方です。

※参考文献の紹介

L'art invisible 邦題「マンガ学」(1993)スコット・マクラウド著

漫画のコマ飛ばし、どこをクローズアップするか等が、2次元を立体化する時のヒントになる。

6. 巻物の手紙

7. コンビニの袋をくしゃくしゃにして、置くと 膨らんでいく。(「G 線上のアリア」の曲とともに) 段ボール、数字を数える、脚立を登り降り、など続く。

8. 薄暗がりの中、小さなおもちゃと遊んでいる。巡回して歩く。おもちゃに飽きる。再びおもちゃのところに帰って、捨てたおもちゃをしみじみながめる。眠る。

9. 床に線を描く。トイレットペーパーを広げる。前からみている。6人の人が舞台を行き交う。ペーパーが乱れる。ペーパーを直す。又人々が行き交う。紙が乱れる。諦めて去る。

10. ティッシュペーパーで鼻をかむ。ティッシュを箱から1枚1枚抜いて落とす。間。拾い集める。

11. 傘を持って歌いながら登場。やがて雨が やんだ、傘を置いて去る。

12. 新しいティッシュの箱を持って登場、ゆっくりと開封。客席の人に取らせる。1枚ずつ抜き取り舞台に撒いていく。箱を残して去る。

■（中断）集まって身体を動かすゲームでリフレッシュ。常に全員でリズムをキープして速く行う動きのエクササイズ。

円になって基本2拍子のステップを踏みながら、クラップでリズムを、「声」を回していく、「声」に「動き」を足していく。1人が円内に入り、ソロで「声」を発して全体とコラボする。円を小さくしていき、お互い見合ってやる。また円を大きくしていく。動きを大きくし、楽しむ。

13. 舞台に4人寝ている。中央で椅子に掛け何か読んでいる。「折紙しようか」と誘う。折り紙教室をやっている。鶴を折る。途中で、飛行機をつくる子がひとりいる。遠くを見る。

14. 平台で小さな正方形の舞台、その上に立つ男。座る。1組のカップルが登場し、何かしている。女が来て去る。セミが鳴いている。舞台奥を白い日傘を差した女が上手から登場、立ち止まり正面を見る。男はカップルの男性の方の方を揉む。その男去る。最初の男、カバンを持って去る。

■ 5人組の即興

次の課題の説明。誰かが発表した即興の要素をひとり1つ選び、5人組の即興に発展させる。

■ プレゼンへのコメント

○ **ロセル** 全部の俳優が同じイメージを持っていたら、それは観客に伝わると信じます。自分達の劇団では、何もない空間で何ができるかをいつも試してみます。今皆さんにやってもらっていることです。

ティッシュペーパーなどが、空調の風に煽られて動いたのも、予想外で面白かった。このように、今、全員で同じ物を見た、味わった感覚を大切にとっておきましょう。脚立の上り下りのシーンは人生に見えたりもしました。

■ 参加者の半数、舞台に出て即興。

○ **ロセル** 人数が多い時は1人があまりやり過ぎなくてもよい。観客には既に観るべき対象がたくさんある。1度登場したら退場しないでみる。

■別の半数が舞台に出て即興。

○ **ロセル** 自分がいつ加わったらいいか、登場したらいいか、もっとも効果的なタイミングを探るのが重要。団場で即興をすると、互いにコンタクトを取りたくなるが、個人をある程度キープする。関係性を想像するのは観客の方にまかせるため。

■『遙かな町へ』から1シーンを作る

2、3人のグループを作り、「遙かな町へ」から1シーンを選んで、プレゼンをする。

○ **ロセル** グループ毎考える時間を取ります。言葉は使用しても良いが、すべて言葉でやらないよう、「印象」やヴィジュアルなイメージをより大切にしてみましょう。

続き、詳細は、  
国際演劇交流セミナー2017-2018 年鑑にて

国際演劇交流セミナー2017-2018  
年鑑

■ 目次 Index ■

2017

デンマーク特集 - ワークショップ・リーディング・シンポジウム	1
韓国特集 - ワークショップ・レクチャー・シンポジウム	21
インドネシア特集 - ワークショップ・レクチャー	49
フランス特集 - ワークショップ・シンポジウム	93

2018

台湾特集 - ワークショップ・レクチャー・シンポジウム	131
韓国特集 - ワークショップ	151
スイス特集 - ワークショップ	181
アルゼンチン特集 - ワークショップ・レクチャー・シンポジウム	199
国際演劇交流セミナー実施年表【1999年～2016年】	241



■ ご希望の方は、日本演出者協会 事務局までご連絡ください。

TEL : 03-5909-3074 / FAX : 03-5909-3075

E-mail : j\_d\_a\_info@yahoo.co.jp